

「城を歩く会」10月バス研修会「さきたま古墳群、忍城、岩槻城」

忍と岩槻、2つの「浮き城」を歩く

平成30年10月19日

山岸弘明

きょうのスケジュール

- 8時45分
- 9時00分
- 10時20分～12時00分
- 12時30分～14時00分
- 15時30分～16時30分
- 17時30分

JR「大宮駅」中央通路、「待ち合わせ、マメの木」集合
 西口鐘塚公園、ソニックシティビル横出発
 さきたま古墳群（保科担当）
 車中自由弁当（十分な昼食時間はありません）
 忍城址（山岸担当）
 博物館（学芸員説明＋自由見学）
 本丸周辺案内
 岩槻城址（山岸担当）
 大宮駅着、解散

今後のスケジュール（詳細は会報を参照ください）

- 11月定例会＝20日（火曜日）横浜の洋館と出会う
- 12月は休会
- 1月定例会＝23日（水曜日）新年会（銀座ライオン）
- 2月定例会＝日は抽選待ち 春季研修会（注意＝変更しました）
- 3月定例会＝19日（火曜日）鎌ヶ谷の史跡をめぐる＝小金中野牧跡、鎌ヶ谷郷土博物館、さつま城（中世高城氏居城）



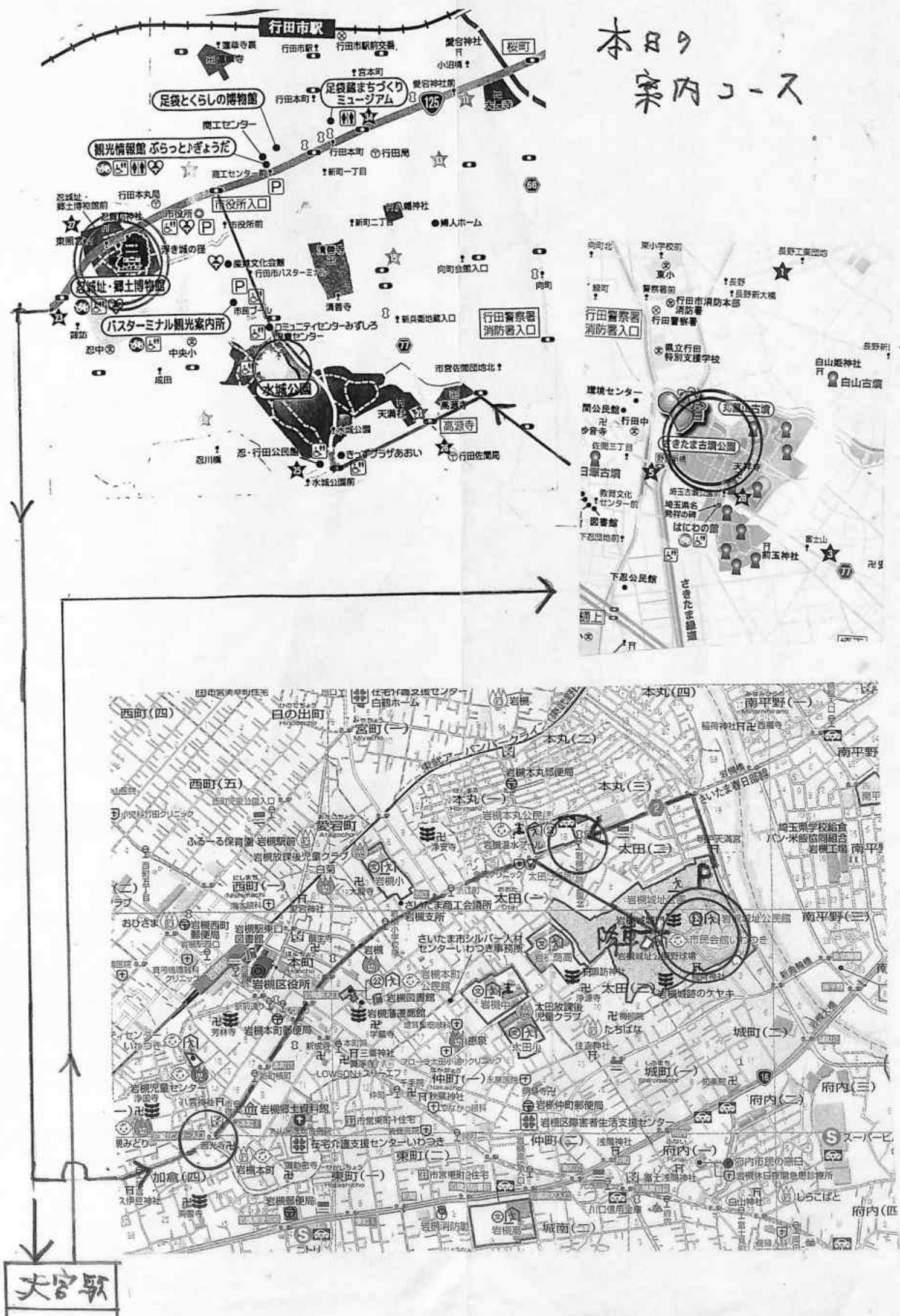
登れる古墳、ここにありませう。
 国宝「金剛銘鉄剣」が出土したことで知られる「稲荷山古墳」や、直径105mの大きさを誇る円墳「丸草山古墳」など、9基の大型古墳が群集する東日本最大規模の古墳群です。
 約30haの園内には、はにわ作りを体験できる「はにわの館」や「埼玉県立さきたま史跡の博物館」などもあり、古代のロマンを堪能できるスポットとして親しまれています。



落ちなかった、落とせなかった城。
 関東七名城の一つとされる忍城は、室町時代の文明年間に築城されました。豊臣秀吉の関東平定に際して、石田三成らによる水攻めにも果敢に耐えたことから「浮き城」の別名が生まれたと伝えられています。
 現在の忍城御三階櫓は、明治6年に取り壊されたものを再建したもので、内部は行田市郷土博物館の一部になっています。

⑩ 岩槻城址公園

この地は、岩槻城の南に位置し、新曲輪・鍛冶曲輪と呼ばれていました。一説には、「天正18年の小田原の役の際、新曲輪口の防衛のために築かれた。」といわれています。城絵図には「新城」と記載されています。大正14年埼玉県史跡に指定されました。
 公園内には市指定文化財の岩槻城城門（黒門）、裏門、ケヤキなどがあります。



本日9
案内コース

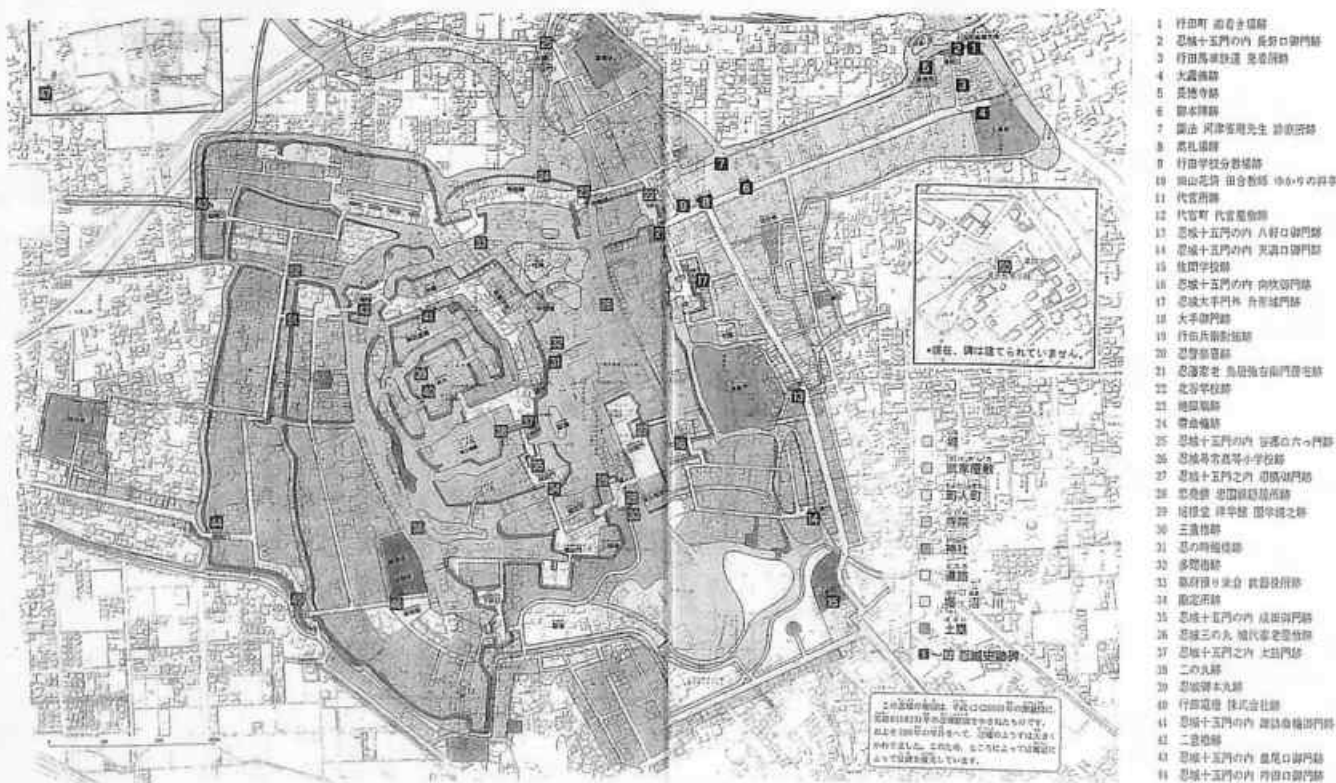
小田原征伐の「水攻め」にも耐えた～忍城を歩く

1) 江戸城北方守りの老中城～松平奥平5万石居城

- ①忍城は「忍沼」と呼ばれた広大な湖沼にあった島々で形成した文字通りの「水城」、鎌倉時代初め、成田一族の在地領主忍氏築城と伝わる。
- ②室町時代初頭の応永7年(1400)成田宗時が本格的な水城に改修、成田氏は忍城を本拠に北武蔵一帯の強力武士団に成長、はじめ山内上杉、古河公方・足利晴氏、上杉謙信に与し、のち小田原北条氏と結んで、小田原外様衆最大級の戦力を有した。
- ③天正18年(1590)、豊臣秀吉の「小田原征伐」は城主・氏長ら主力部隊が小田原に出陣、成田泰季以下城兵2400の留守部隊が城を守った。
- ④攻め手大将・石田三成は城の周りに堤を築いて利根川の水を引き入れたが、忍城は水に強く、逆に三成軍の堤が大雨で決壊、大きな被害を出した。
- ⑤慶長8年(1603)江戸幕府を開いた徳川家康は忍城を重視、「江戸城北方守り」の要として中堅譜代老中家を配した。酒井忠勝5万石、松平大河内信綱3万石、阿部忠秋以下9代5万石をへた松平奥平5代忠敬5万石の時、明治維新を迎えた。
- ⑥明治6年廃城、建造物のすべてが取り壊された。水濠も明治以降次々と埋め立てられ、外堀の一部が「水城公園」として保存された。
- ⑦昭和62年、本丸跡に郷土博物館を建設、元2の丸の御三階櫓を模擬再建した。

2) 秀吉側室の縁で烏山3万石に復活するが無嗣改易～その後の成田氏

- ①忍城は小田原開城後の6月16日落城。城主・氏長は会津の蒲生氏郷に預けられる。
- ②甲斐殿(成田氏長の娘)＝関白奥に向かわせ給う時、成田の妹(娘)無双の美人なりと聞こし召し、下野国小山の辺り百々塚の御陣に召されより、御寵愛浅からず、この女房の折りにふれて、兄(父)のこと歎き申せし故とぞ聞こえける。(藩翰譜)
- ③成田下総守氏長＝天正19年秀吉から烏山2万石拝領、文禄4年没。
- ④成田下総守長忠＝氏長の弟。文禄4年兄遺領を相続、関ヶ原の合戦は徳川に与し、戦後3万7000石に加増された。元和2年病滅。
- ⑤成田左馬之助泰之＝長忠2男。長男も急逝し、相続をめぐる家臣紛争で1万石に減封、泰之も元和7年頓死、「無嗣廃絶」となる。



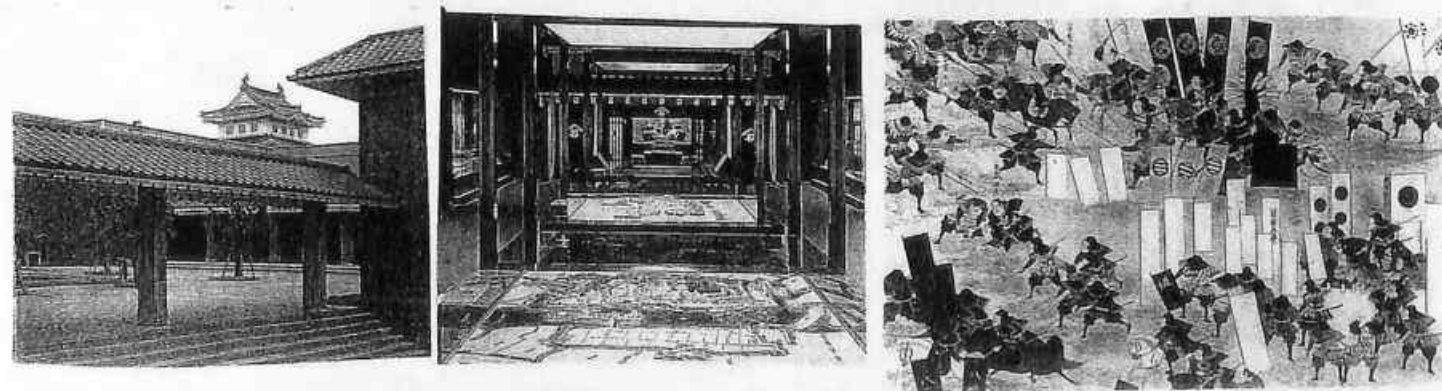
- 1 行田町 前向き橋
- 2 忍城十五門の内 長野口御門跡
- 3 行田馬場跡 見張御門
- 4 大蔵御殿
- 5 長徳寺跡
- 6 御本陣跡
- 7 御法 河津宗隆先生 跡御本陣
- 8 高札場跡
- 9 行田郷校分館跡
- 10 須山花岡 田舎敷跡 赤かき御陣
- 11 代官御殿
- 12 代官町 代官御殿跡
- 13 忍城十五門の内 長野口御門跡
- 14 忍城十五門の内 長野口御門跡
- 15 長徳寺跡
- 16 忍城十五門の内 長野口御門跡
- 17 忍城十五門の内 長野口御門跡
- 18 大手御門跡
- 19 行田馬場跡
- 20 忍城御本陣跡
- 21 忍城を 鳥居強右衛門御殿跡
- 22 北谷平野跡
- 23 御本陣跡
- 24 御本陣跡
- 25 忍城十五門の内 長野口御門跡
- 26 忍城寺町等小学校跡
- 27 忍城十五門の内 長野口御門跡
- 28 忍城寺町 忍城寺跡
- 29 忍城寺町 忍城寺跡
- 30 三善御殿跡
- 31 忍の陣地跡
- 32 多摩御殿跡
- 33 忍城御本陣跡
- 34 忍城御本陣跡
- 35 忍城十五門の内 長野口御門跡
- 36 忍城三の丸 城代家老御殿跡
- 37 忍城十五門の内 長野口御門跡
- 38 二の丸跡
- 39 忍城御本陣跡
- 40 行田郷校 株式会社跡
- 41 忍城十五門の内 長野口御門跡
- 42 二の丸跡
- 43 忍城十五門の内 長野口御門跡
- 44 忍城十五門の内 長野口御門跡
- 45 忍城十五門の内 長野口御門跡
- 46 忍城御本陣跡
- 47 忍城御本陣跡
- 48 忍城御本陣跡

3) 行田の歴史、文化を紹介～行田市立郷土博物館(団体入場)

- ①「さきたま古墳群」から20分ほどで忍城へ。
- ②「水城公園」前を通り抜ける。元忍城外堀湖沼で、ここからが城内になる。はじめ忍城一帯は湖沼で、城は沼地に点在した島に築かれた。水濠はほとんどが埋め立てられたが、一部が水城公園として保存された。
- ③かつての水濠沿いを直進、市役所を左折、本丸跡の行田郷土博物館駐車場に到着。
- ④行田郷土博物館(博物館学芸員案内=20分+自由見学10分)集合時間厳守
中世の行田＝築城と水攻め(三成の水攻めはどのように行われたか、なぜ成功しなかったのか、留守部隊の活躍)
近世の行田＝城と藩主の移り変わり、その時代、城下の暮らし
足袋と行田、古代の行田＝古代の暮らし、銘文鉄剣
忍城御三階櫓(資料館)

4) 明治の鳥瞰図の描写をもとに再建された模擬天守～本丸周辺を歩く

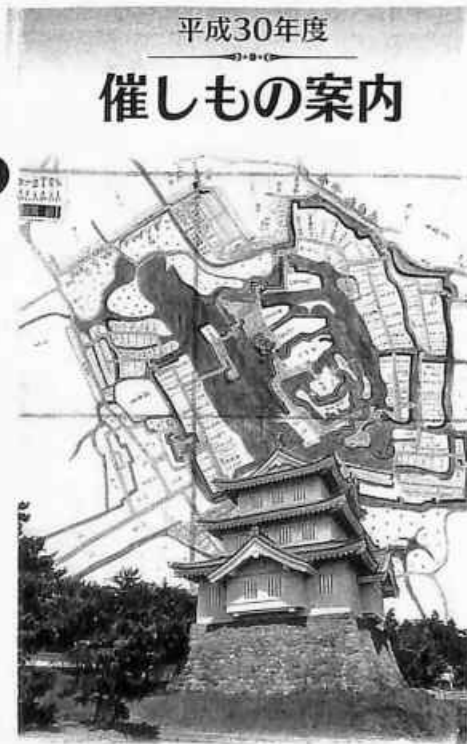
- ①忍城の本丸は將軍御成り御殿用地として確保されたが將軍が休宿泊されることはなかった。通常は樹木の生い茂る林であった。
*明治6年「旧忍城建物入札番号記」＝本丸内物置長屋1棟、付り腕木門1か所、外2塀
- ②鐘楼＝2の丸にあった鐘楼を復元、梵鐘は享保2年銘、城下に時を知らせた。
- ③薬医門、続き塀と橋(模擬)＝本来はない。博物館開設のとき見学用通路として建造。
- ④御三階櫓(模擬天守)＝郷土資料館展示室の外観。忍城には2の丸に「御三重櫓」と「二重櫓」の2基が上げられたが、本丸に櫓はなかった。明治6年の鳥瞰図に沿って御三階櫓外観復元、模擬的な櫓で内部は郷土博物館の展示室になっている。
- ⑤御三階櫓(御三階)は元和の「武家諸法度」によって築城や増改築が規制された以降の代用天守のこと。関東では元和以前から存在した小田原城と沼田城以外に天守はなく、御三家の水戸家ですら天守名乗りは許されなかった。
- ⑥御三階櫓は天守の三重櫓と構造は同じ、破風など外観の装飾を質素にしたものが多い。屋根は三重、普通内部も3階だが、ときに4階、5階もあった。天守は不許可だが、御三階櫓ならOK。諸藩は名前だけを変えて届け出た。
- ⑦徳川政権のおひざ元である関東では、元和以前から存在した小田原城と沼田城以外、川越、佐倉、関宿、大多喜など有名なものはすべて御三階櫓である。一方関八州主流の陣屋は原則として櫓を持てなかった。
- ⑧御三階櫓を見上げる＝外観復元だが実際より大きめに作られている。3重3階、層塔型。上に行くほど1間ずつ狭ばめて低減率をあわせた。長方形の長面口側が正面、初重に千鳥破風出窓石落とし、3重は軒唐破風、全体に装飾性のないシンプルな造り。壁面は柱を漆喰で包み込んだ大壁、窓は半間戸の武者窓、弓鉄砲の射撃場になる。
- ⑨石垣はイメージ。穴倉内部も展示室になっている。
- ⑩御三階櫓前で記念写真



5) わずかに本丸土塁などが現存～地形が一変して面影はない

- ①「ぎょうだ歴史ロマンの道」看板=武器屋敷跡。連絡通路は小島を利用した郭ごとの道並みをイメージしたものと考えられる。
- ②市教育委員会看板=ぎょうだ歴史ロマンの道、浮き城の径
忍城と行田町=忍城は室町時代の15世紀後半に成田氏によって築られました。天然の沼地の中に島状に残る微高地や自然堤防を巧みに利用して築かれた忍城は、守りやすく攻めにくい関東きっての名城とうたわれていた、と伝えられています。(中略)
寛永16年に老中阿部忠秋が城主路になると、城と城下町の整備が50年間に亘って行われ、御三階櫓などが建設されて「老中格の城」にふさわしい城構えになりました。そして武士は城の周辺に、町人は東側の行田町に集められました。行田町は忍10万石の城下町、日光裏街道の宿場町として繁栄しました。(後略)
- ③水濠(湖沼)跡=かつて幅200mの水濠。石田三成はこの水濠に利根川を流し込み、水位を上げて城ごと湖底に沈める、という大規模な「水攻め」を計画したが成功しなかった。水濠は戦後埋め立てられ、現在は行田市役所、文化会館、テニスコートなどになっている。
- ④2の丸御殿跡=現在の忍中学校に2の丸御殿があった。行田診療所に表門、御殿は東から玄関、大広間、表向きと続き、藩主は校舎の所にあった中奥に起居した。また側室や子女の奥向きは西側奥まった一画に所在した。建物は間口48間、奥行き28間、総坪数608坪、畳755畳、廊下8、トイレ11、湯殿などであった。
- ⑤明治4年の廃藩置県で忍県庁となるが4か月で廃止、明治6年の城郭存廃令で廃城となり競売、635両で落札されたが、以後の経緯は不詳。明治時代にすべてが取り壊された。
- ⑥本丸南橋(大手に相当)から本丸の駐車場に戻る。
- ⑦本丸跡碑(第二駐車場北側)=忍城御本丸跡、行田市教育委員会

(裏面)下野唐沢山、宇都宮、太田金山、佐竹の太田山、厩橋、川越、忍を関東七名城と古くからいわれ、その忍城の中郭が御本丸であったが、天守閣はなく、昼なお暗い木立で諏訪曲輪、二の丸、井戸曲輪と2重、3重に囲まれていた。



本丸土塁



水城公園



本丸肥模聖



忍城(博物館)

第32回企画展
鷹狩と忍城
開催中

沼に浮かんだ「浮き城」～岩槻城を歩く

1) 太田道灌3名城の1つ

- ①岩槻城は室町時代、扇谷上杉家の命を受けた太田道真と道灌父子が築城、江戸城、川越城とならぶ道灌3名城(諸説)として知られる。
- ②戦国時代は太田氏と後北条氏が争い、後期は太田氏の後継騒動に乗じた後北条氏に属した。天正18年(1590)豊臣秀吉による小田原攻めでは城兵2000が浅野長吉軍に包囲されて降伏した。
- ③小田原旧領は家康所領と変り、岩槻城は高力清長領に続き、青山、阿部、板倉などの中堅譜代大名が変遷した。
- ④宝暦6年(1756)9代将軍の側用人を勤めた大岡忠光が2万石で迎えられ、8代忠貫の明治4年、廃藩置県となった。

2) 最大級の水濠を誇る～元荒川の川水を水源とする沼地を利用した堅城

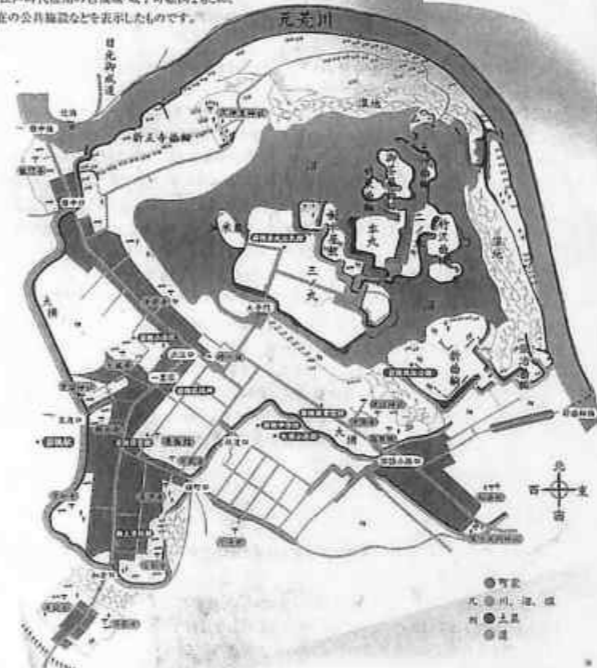
- ①城は元荒川(江戸始めまでの荒川本流)右岸に広がる舌状台地の先端に立地した平城で、荒川とその川水を水源とする沼地を利用した天然の要害。三方を水堀が囲み、大手方面から日光街道の御成り道が走って将軍の宿泊城とされた。
- ②その姿から「浮き城」「白鶴城」と別称された。およそ3万坪の城地は深い水濠と空堀、土塁や白壁塀をめぐるせた連郭式縄張りでも木橋と土橋がそれぞれの郭を連結した。
- ③関東の城らしく石垣、天守のない「土の城」で、本丸に3基、2の丸に1基の櫓、茶屋曲輪に物見台、初期は日光社参の将軍家御成御殿、藩主御殿などを構えた。

3) 旧日光御成り街道で岩槻城下へ

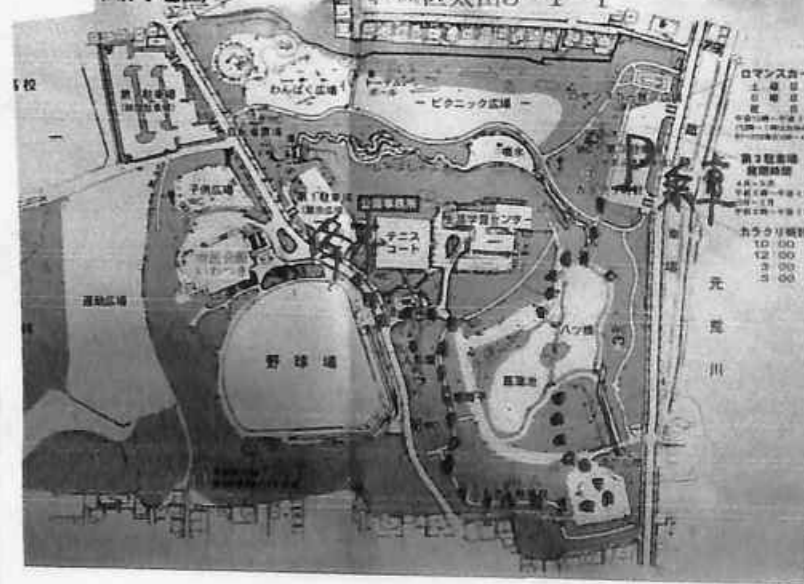
- ①忍城のある行田市から鴻巣、北本、桶川と南下、さいたま市の岩槻区へ。
- ②旧日光街道に入る=日光の徳川家康霊廟、将軍家社参に使った道。江戸の本郷追分で中山道から分かれ、王子、川口、岩槻をへて幸手で本街道に合流した。⑫代将軍家慶の日光参詣にしたがった供揃いはあわせて20万人、本往還、脇往還はおよそ2か月にもわたって完全にマヒした。
- ③市宿口(加倉口)=加倉地区と岩槻本町の町境に土塁(大構え)、水濠、枡形、木戸を構えた。岩槻城は町を城内に取り込んだ総構え城下で、ここからが広義の城内になる。
- ④岩槻郷土資料館(国登録文化財)=昭和始め建築の警察旧庁舎。内部はアールデコ意匠

岩槻城と城下町模式図

江戸時代後期の岩槻城・城下町地図をもとに、現在の公共施設などを表示したものです。



園内地図



- ⑤旧街道の市宿通り高札場、本陣、伝馬所、旅籠などが立ち並んだ岩槻城下の中心で、現在は商店街になっている。諸官庁街は一步奥まったところに所在、岩槻駅、区役所、図書館、小中学校などの入り口表示がめだつ。
- ⑥人形店が軒を並べる＝江戸時代はじめ、日光東照宮の造営職人の一部が岩槻に住みつき、人形造りをはじめたのがおこりという。江戸中期、桐のおがくずをのりで固めた岩槻人形は従来の土人形にくらべて軽く、こわれにくく精巧なため人気を集めた。現在およそ600軒、部品造りから完成品まで分業で、その中心となる頭（かしら）は90%を岩槻が占める「人形の町」として知られる。
- ⑦渋江交差点＝かつて三叉路、巨大堀（左下地形みえる）越しに岩槻城が広がった。
- ⑧日光御成り道は左折して田中口へ。
- ⑨右折 100m「時の鐘」＝大手門前の会所につけられ、明け六つ、暮れ六つの時を知らせた。現在も朝夕、澄んだ音色をとどろかしている。
- ⑩大手門跡＝元は三日月池の丸馬出し、大空堀、土橋、大手枡形、櫓門で構成したが、周辺は宅地や宗教団体施設などによる改変が激しい。三日月堀の半円に沿って迂回する。
- ⑪大手門前＝閑静な旧武家屋敷が続くが、時間の関係で立ち寄らない。
- ⑫バスは巨大堀あとの低地をこえて主郭部の3の丸へと進む。

4) 後北条時代の土塁、空堀が現存～新曲輪と岩槻城跡公園

- ①3の丸跡＝本丸西側に立地する、主郭高台最初の曲輪。武家屋敷、勤番長屋、武器蔵などが置かれたが、江戸中期の元禄6年、城主御殿が完成して、歴代藩主が居住した。明治6年の廃城で分散売却されて取りこわされ、遺構はまったく存在しない。現在の住所、本丸1丁目と太田1丁目の一部が3の丸で、本丸公民館、温水プール、消防出張所などのほかは住宅地になっている。
- ②3の丸御殿跡＝一帯を遠望。玄関、大広間、書院に続き、表向き、中奥、奥などの書院建築が連なったが、現在は宗教団体駐車場など。所々現存土塁が垣間みえる。
- ③旧湖沼水濠跡低地をすすむ。途中「わんぱく広場」など市民の憩いの場になっている。当時は水面下で歴史的遺物はない。高台の「新曲輪」に入る。曲輪名は新だが、鍛冶曲輪とともに太田道灌時代、中世城郭の色濃い「土の城」が現存している。
- ④岩槻城址公園＝市民会館を通過、野球場で降車。「岩槻城址公園」に入る。旧岩槻市の都市計画公園で、開園時は「岩槻公園」とよばれたが、さいたま市との合併にともない「城址」の2字が加えられた。14haに及ぶ起伏の激しい公園で、現存する土塁、土塁、空堀、菖蒲池、八つ橋などをめぐる。

日光御成り道中絵図に見る城下町の町並み

江戸時代後期の絵図に描かれた入居町と市宿町、町境の水戸で区画された御成り道に宿屋が軒を並べ、その手前には大堀、前には宮城跡が描かれており、城下町並みの見どころが手にとらえられます。



3の丸 模写



市宿口



岩槻市街



太田忠光



大橋之跡



太田忠光像

本丸 模写



岩槻城内



土塁と空堀



白鶴城砦



本丸御成り跡

- ⑤移築、岩槻城城門（黒門＝市指定史跡）
伝承は大手門だが、大手門は複数の資料が櫓門を描いて整合しない。また、規模も小さく精々城内に屋敷を構えた家老クラス表門まで。中堅譜代、大名居城表門は到底、考えられない。明治維新後、県庁、市役所通用門をへて、昭和45年現在地に移築、寄棟造り、棧瓦葺き、長屋門形式、桁行13m、奥行3.7m、7間3戸。上半分が白漆喰真壁、下は下見板張り、黒漆塗装。
- ⑥新曲輪と鍛冶曲輪の土塁、空堀＝深さ5m、高さ5mほどに復元整備された空堀堀底みちを進む。高い二重土塁が圧倒、クランクが連続する横矢掛り、馬出し曲輪、堀障子など、「小田原攻め」に備えた堅固な後北条流縄張りを垣間見せる。
- *さいたま市教育委員会「堀障子」説明看板
現在地は新曲輪、鍛冶曲輪の間の空堀である。発掘調査の結果、堀底まで3mほど埋まっており、堀底に「堀障子」のあることが確認された。堀障子は「敵」ともいい、城の堀に設けられた障害物のことである。堀に入った敵の移動を妨げたり、飛び道具の命中率を上げることを目的として築かれたと考えられ、小田原の後北条氏の城である小田原城、山中城などからも見つかっており、後北条氏特有の築城技術とみられている
- ⑦白鶴城跡碑＝太田道灌が築城した時、沼のほとりでつがいの白鶴が木の枝を水面に落とし、その上に舞い降りるところをみたことをヒントに、たくさんの竹を束ねて沼に埋めて盛り土をし、城造りをしたとされる
- ⑧真っ赤な「八つ橋」が水濠の名残を伝える。一帯の春は「お花見会場」として賑わう。
- ⑨北側の広場は広い芝生で、「からくり時計」や東武鉄道の「ロマンスカー」がある。
- ⑩本丸、2の丸、3の丸の主郭高台を遠望、巨大な湖沼水濠に「岩槻の浮き城」を再確認する。第3駐車場からバス乗車。

5) 将軍家光も泊まった～本丸御成り御殿跡を一瞬通過

- ①右手土堤先は元荒川。岩槻城は元荒川の水流が低地に滞留したことによる湖沼とその島々に立地する。
- ②再び主要地方道「さいたま春日部線」にでる。高台は主郭部で2の丸、次いで本丸跡。バスは一瞬通過、ファミマ横、マミーマート前の元ガソリンスタンド空地がかつて華麗を極めた本丸御成り御殿跡で、空堀、土塁、白壁に御成り門、櫓3基を廻した。案内看板と石柱もあったが撤去、いまでは将軍秀忠、家光が宿泊した往時を偲ぶよすがはない。
- ③本丸の先、空堀を挟んで2の丸、土塁があって、急ガケの水濠になっていた。
- ④進んで3の丸の消防前に出て、以下往路に戻る。3の丸、本丸、2の丸と串刺し状に通過したが、遺構はまったく存在しない。
- ⑤午後6時、大宮駅着、きょうの全日程を終える。

以上

さきたま古墳群と国宝・金錯銘鉄剣

(1) さきたま古墳群

◆古墳時代とは

日本の時代区分は、旧石器時代(数十万年前～約1万年前ごろ)、縄文時代(約1万4000年前ごろ～紀元前4世紀)、弥生時代(紀元前4世紀～3世紀)を経た後、古墳時代を迎える。古墳時代は3世紀中ごろから7世紀ごろまでの約500年間続く。弥生時代と奈良時代の間において、日本列島がはじめて国家を形成していくという、激動の時代であった。

この時代に築かれた古墳は、全国で16万1560基(平成13年、文化庁調べ)といわれる。兵庫県(約1万6000基)・千葉県(約1万3000基)、福岡県・京都府の順である。

「古墳」とは、「大型の墳墓」のこと。多くは当時の権力者、豪族などが被葬者である。当会は、かつて東京・野毛の大塚古墳(全長82メートルの帆立て貝型)、東京・芝の丸山古墳(125メートル、前方後円墳)などを訪れたが、まさに、全国各地に「大塚」や「丸山」があったのだ。

なお、弥生時代の墓は「墳丘墓」、奈良時代の墓は「墳墓」と呼び、古墳と区分される。ところで、この時代を象徴する「古墳」が多く造られたのは、「ムラ」から「クニ」が生じるほど、地域の勢力に強弱と、個人の権力に大きな差が生まれたからである。

図式的に言えば、次のようであろう。
弥生時代後期、農耕技術が進む→余剰生産が生じる→貧富の差、つまり階級が生まれる→労働管理面でも、種モミや水の配分、スケジュール管理などで支配・非支配の関係が濃くなる→自己防備のため「ムラ」は「クニ」に転化し、強者にとって政治的シンボルが必要になってくる→巨大建造物としての古墳が現出。

◆古墳時代の推移

115

◎前期

3世紀中ごろ一卑弥呼が死んだとされるころ、近畿地方の奈良を中心として瀬戸内海沿岸にかけて前方後円墳という、有力者の墓が造られるようになる。古墳時代の始まりである。前方後円墳は日本独自の形態である。日本最初の前方後円墳は、奈良県の箸墓古墳といわれる。

古墳の形や大きさ、葬儀の方法も統一されるようになる。次いで、前方後方墳・円墳・方墳などが生じ、被葬者の身分や立場を示すことができるようになる。

◎中期

5世紀ごろ、現在の鹿児島県から岩手県まで、全国で前方後円墳が造られる。一方、ヤマト政権の中心の一つである河内(大阪府)には墳丘長400メートルを越す巨大な前方後円墳が造られ、ヤマト政権の王である大王はますます力を強めていく。

今週の10月16日付け宮内庁発表記事「仁徳陵 初の共同発掘」。日本最大の前方後円墳(全長486メートル)「大山(だいせん)」を、宮内庁が堺市と共同で調べようというのだ。宮内庁はこれまで天皇陵とされてきた古墳の調査を「皇室の祖先の墓は静安と尊厳が必要」として厳しく制限してきた経緯があるだけに、前例のない試みである。古墳の調査は、このような困難さがあったのである。仁徳陵とされてきた大山古墳は、最近、仁徳天皇陵ではないという説が有力になっているのだ。

◎後期

6世紀後半になると、直径10メートル程度の小さな古墳も造られるようになる。日本の古墳の8、9割を占めるこれら群集墳は、より身分の低い人にも許されるとともに、ヤマト政権の力がそうした階級にまで及ぶようになったことを示す。仏教伝来=538年。

◎終末期

聖徳太子が推古天皇の摂政となる7世紀(693年)には、前方後円墳は造られなくなる。飛鳥寺や法隆寺が建てられ、古墳の祀りが、仏教の祀りに注力されるようになる。古墳によって身分や立場を表さなければならぬ時代は終わる。

◆さきたま古墳群

埼玉県北部、行田市。利根川と荒川が最も接近する地域に「さきたま古墳群」がある。消失した小円墳を含めると前方後円墳9基、円墳36基からなる東日本では最大規模の古墳群である。

最も古い古墳は、5世紀末に造られた「稲荷山古墳」(長径120メートル)。次いで、円墳として日本一の規模を誇る「丸墓山古墳」(直径105メートル)が続き、7世紀初頭にかけて「二子山古墳」(138メートル)「鉄砲山古墳」(109メートル)「將軍山古墳」(90メートル)の順で築かれたとされる。

◆国宝・金錯銘鉄剣の出土

昭和43年(1968)、稲荷山古墳の発掘調査が行われ、後円部から礫槨と粘土槨、2基の埋葬施設が検出された。粘土槨は盗掘されていたが、礫槨はほぼ完全な形で発掘され、42点の遺物が出土した。副葬品は武具ばかりで、被葬者がすぐれた武人であったことを示している。この遺物のほとんどが国宝に指定されている。

そこで「金錯銘鉄剣」である。出土してから10年後の昭和53年、金象眼の文字が見つかる。剣の表と裏には、115文字もの万葉仮名が刻まれていた。専門家が苦心して解読した結果、次のように読むのが一般的とされている。(本文は、4ページの別表参照) 604

「(わたくし)ヲワケの先祖は、代々、杖刀人首(親衛隊長)を務めてきた。私はワカタケル大王(雄略天皇)に仕え、斯鬼(しき)の宮で天下を治めるのを補佐した。そして、辛亥の年(471)7月、このすばらしい刀剣に、これまでの輝かしい功績を刻んで記念とする」。

この銘文は、わが国の古代国家の成立を読み解く、貴重な手掛かりとなった。特に、雄略天皇存在の基準年を比定することに大きな貢献をなしたとされている。

「とりわけ、辛亥年(471年)に刻まれた文字資料ということで、115文字の銘文は比類のない価値をもつ。文字どおり100年に1度の、正規の大発見であった」。

京都教育大・和田萃助教授は自著『大系 日本の歴史』第2巻「古墳の時代」で最大限の評価を下している。

◆被葬者はだれだ

そこで、この古墳に葬られたのはだれなのか。常識的に考えれば「ヲワケ臣」とみるべきだろう。その場合にも、ヲワケ臣を王権の中核にいた人物とみるか、北武蔵の在地氏族の首長とするかで大きく変わってくる。

王権の中核にいて、北関東に派遣されその開発につとめたか、毛野国(けぬこく)への威嚇につとめた人物かなのか。あるいは、北関東に居住していたヲワケ臣が杖刀人の頭としてヤマトに奉仕し、天下を「左治」するほどの功績を示した後、金象眼の刀を作らせ、それを持ち帰り、副葬したのか。それとも、ヲワケ臣とは無関係の人物を経由して何らかの事情によって稲荷山古墳の被葬者の手に渡ったのか、いまだ答えはだされていない。

(2) 石田堤

◆「のぼうの城」

関東は見渡す限りの平野である。加えて、忍城は数ある平城の中でも湖沼の中に築かれた水城である。この城がいつ、だれによって造られたかは不明であるが、書物に残っているのは室町中期、1490年とも1501年ともいわれる成田氏の入城によるものである(西ヶ谷恭弘氏)。成田氏は、藤原氏の流れであるとか、横山党に属していたといわれているが、明確ではない。

その後、さまざまな変転を経て、忍城は豊臣秀吉による小田原征伐のころには北条氏の配下にあった。天正18年(1590)、秀吉は全国21万の大軍をもって北条氏政(4代)・氏直(5代)父子の居城、小田原を攻めた。

同時に、関東全域に置かれていた北条氏配下の山中城・下田城・江戸城・箕輪城・鉢形城など数十の諸城も次々に攻略した。

上野館林城を攻め落とした秀吉軍は、石田三成を総大将として同年6月5日、忍城攻略に取り掛かった。しかし、かつて3回、名将・上杉謙信が攻撃を図ったがいずれも不調に終わった守りに強い堅城である。

これを攻めるのは、石田三成・長束(なづか)正家・大谷吉隆ら直系の兵と、すでに降伏した北条方諸城の兵を合わせて2万3,000余名。これに対し、忍城の方は、城主氏長は500余の兵を率いて小田原城に籠もっていたので、留守を守るのは、城下の侍79名、足軽420名、ほかに百姓・町人・僧侶・雑兵など3,700名。うち子供が1,100名にのぼっていた。

「水攻め」と「石田堤」

「この城(忍城)、四方に大沼をかかえ、道狭く左右深田にて、大勢の進退自由ならず、細道を順に進み、攻め戦う間、寄せ手に手負い(負傷者)死人はなはだ多し」と『忍城戦記』にある。

守兵に10倍する攻城軍なのに戦果のあがらない三成は、円墳の丸墓山にのぼって一策を思いつく。かつて秀吉が備中高松城攻略に用いた「水攻め」であった。近くを流れる利根川と荒川の水を利用して、沼に囲まれた低平な忍城を水没させて開城させようとしたのだ。

昼は、一人につき米1升と銭60文、夜の工事には米1升と銭100文を日当として近郷から数万の人夫を動員し、昼夜兼行で堤造りにあたらせた。工事は4、5日で完了。丸墓山を基点として、北は利根川の右岸、南は熊谷から荒川の左岸に達する全長14キロ(3里半。一説には28キロとも)、高さ1間ないし2間、基底の幅6間という大規模な長堤であった。忍城の東・南・西の3方をV字形に囲み、利根川と荒川の水を流し込んだ。

ところが、「水攻め」は失敗に終わった。築堤工事の際、城内兵も紛れ込んで人夫となり、日当をもらって城内に兵糧を送り込んだという。また、ふだんの成田氏の善政に応えるため、工事人夫はかなり手を抜いて堤を築いた(西ヶ谷恭弘氏)。水はたまるが忍城の高さには達せず、加えて引き入れた水は逆流して、包圍陣は水びたしとなった。

その後の忍城

三成軍は、包圍陣を強化し、その後も攻撃を加えるが、城には近づけなかった。水攻めの逆流によって、田畑の泥沼化はさらに激しくなり、城攻めは妨げられた。

一方、小田原城内に籠もる領主の成田氏長は、忍城内とは逆に小田原開城を主張して、秀吉と通じていた。7月5日、小田原城は開城ときまったが、忍城自体は孤軍奮闘を続け、城が三成に明け渡されたのは、小田原落城から11日後のことであった。氏長は秀吉により下野烏山城(3万7,000石)に置かれ、その後、忍城には代々、家康の譜代の家臣が据えられた。

金錯銘鉄剣

裏

其兒名加美搜余其兒名手獲居百世為林刀人首奉事末至今獲加多支函大王寺在斯鬼宮時吾大治天下令作此百練利刀記吾奉事祖但也

表

辛亥年七月中記手獲居百祖多意富比埜其兒多加利呈尼其兒名己加利獲居其兒名多加搜獲居其兒名多沙鬼獲居其兒名半五比

名はハテヒ

(表銘文)辛亥の年七月中、記す。オワケの臣。上祖、名はオホヒコ。其の兒、(名は)タカリのスクネ。其の兒、名はテヨカリワケ。其の兒、名はタカヒ(ハ)シワケ。其の兒、名はタサキワケ。其の兒、名はハテヒ。

(裏銘文)其の兒、名はカサヒ(ハ)ヨ。其の兒、名はワケの臣。世々、杖刀人の首と為り、奉事し來り今に至る。ワカタケ(キル)口)の大王の寺シキの宮に在る時、吾、天下を左治し、此の百練の利刀を作らしめ、吾が奉事の根源を記すなり。

鉄剣に刻まれた115文字は「(わたくし)ワケの先祖は、代々杖刀人首(親衛隊長)を務めてきた。わたくしはワカタケル大王(雄略天皇)に仕え、天下を治めるのを補佐した。そこで辛亥の年(471)7月に、このすばらしい刀剣にこれまでの輝かしい功績を刻んで記念とする」と記されています。この銘文は、我が国古代国家の成立を読み解く、貴重な手がかりとなります。

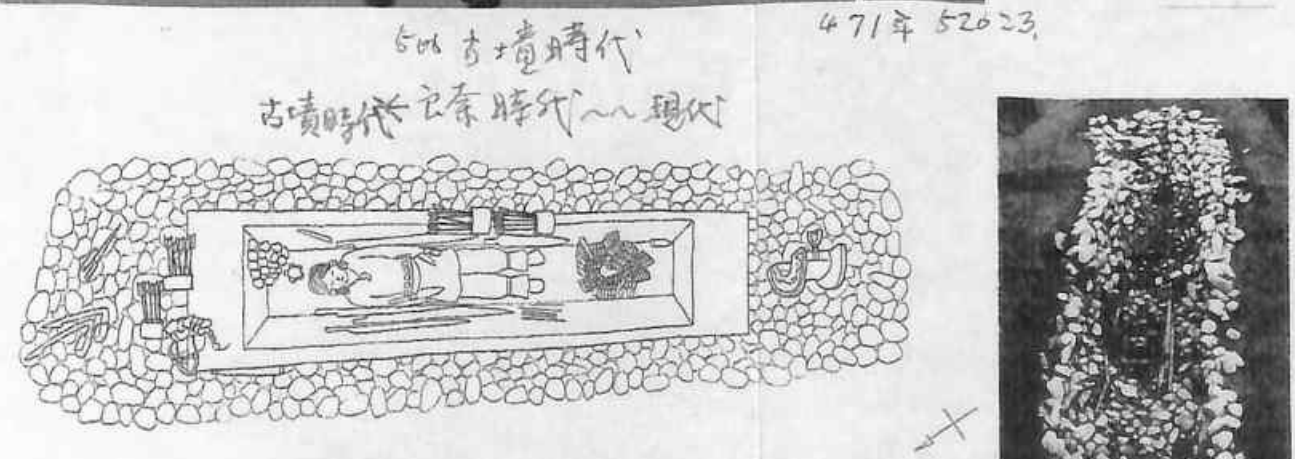
雄略天皇



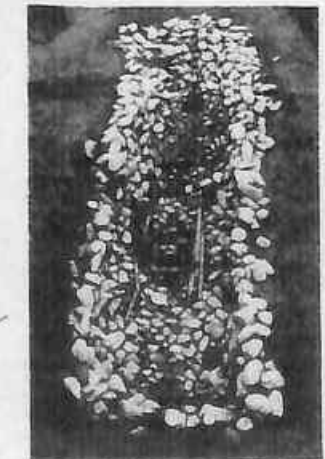
第21代天皇
在位期間
安康天皇3年11月13日 - 雄略天皇23年8月7日

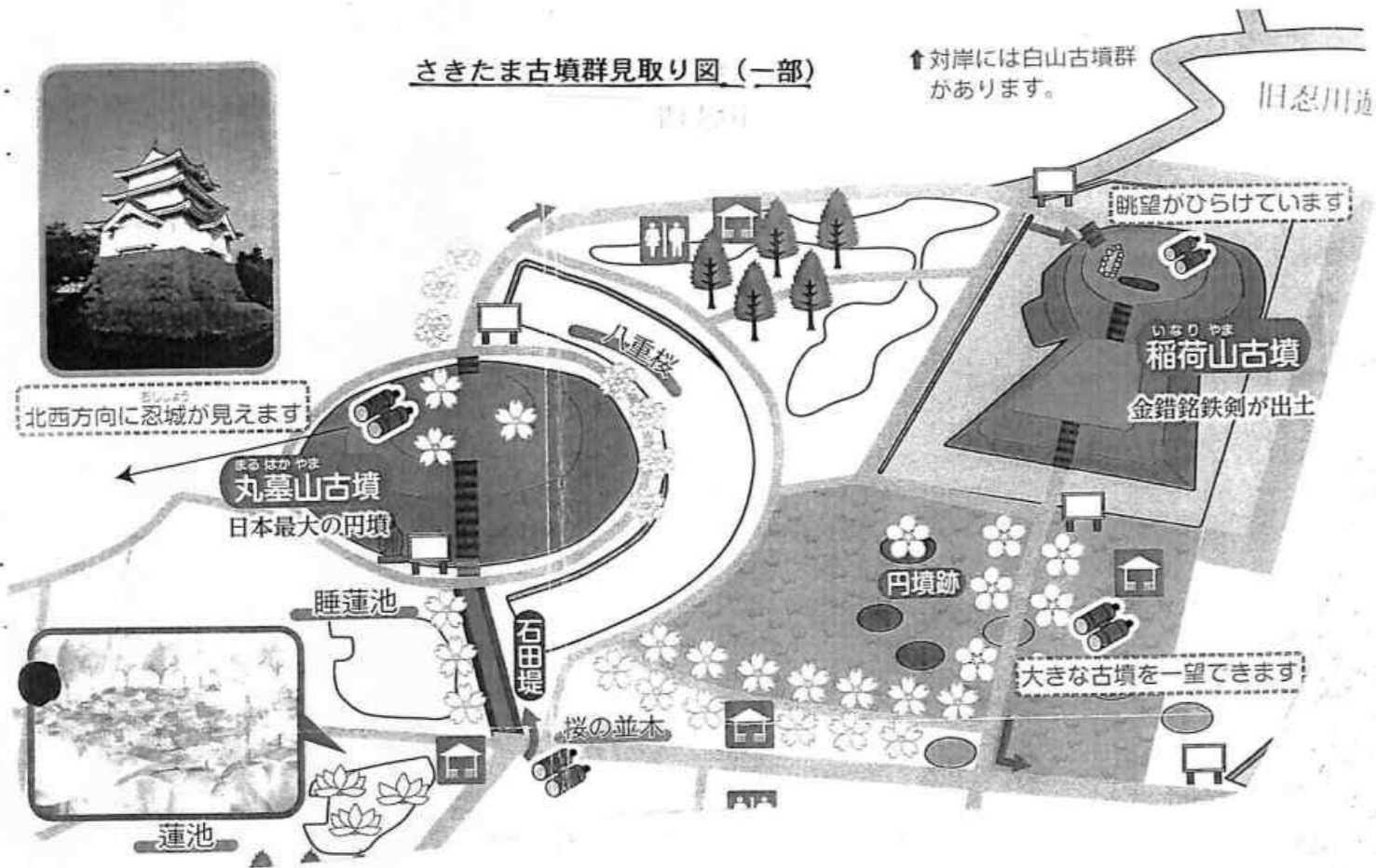
国宝 金錯銘鉄剣

471年 52623



稲荷山古墳礎礎 礎を舟の形に敷きつめ、木棺を安置している。銘文のきざまれた鉄剣は、被葬者の左脇のところから出土した。

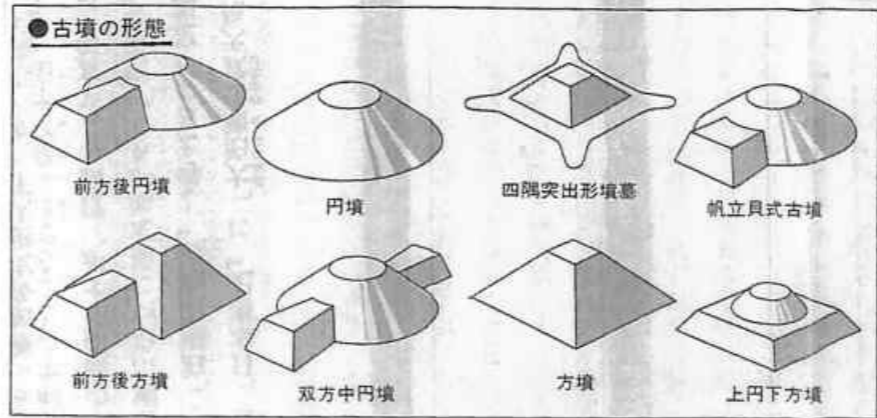




◆古墳の規模

古墳名	主軸長	幅	高さ	前方部幅	高さ
丸墓山	105	—	18.9	—	—
稲荷山	120	62	11.7	74	(10.7)
二子山	138	70	13.0	90	14.9
鉄砲山	109	55	9.0	69	10.1
將軍山	90	39	(8.4)	68	(8.2)
中の山	79	42	5.1	44	5.4
互塚	73	36.5	5.1	47	4.9
美の山	66	34	5.6	40	6.0
夢岩山	53	30	3.4	30	3.3

丸墓山古墳 (日本最大の円墳)



稲荷山古墳から出土した埴輪

石田堤

